

八代尚宏著『日本の雇用慣行を打ち破れ ～働き方改革の進め方』  
日本経済新聞出版社（2015年）

日本の社会と経済の発展のために積極的な著作活動と提言を長年にわたり行ってきた著者が、繰り返し訴えてきた主張と提言を集大成的にまとめた著作である。

残念ながら書名は日本の雇用慣行に関する啓蒙本と似たようなタイトルとなっており、手に取る前は正直なところやや懸念したのだが、実際には日本の雇用慣行の実態と労働問題の現状を的確に紹介し、同時に、日本が抱える幅広い労働問題に対し、多岐にわたる政策と取り組みの提言を行った著作となっている。取り扱ったテーマは、長時間労働の是正、女性管理職の拡大、定年制から考える雇用における年齢差別の撤廃、不明確な解雇ルールの明確化、不安定な非正規労働者問題の解決、外国人労働活用の方策、そして、企業人事部のこれからのあり方など多岐にわたっている。いずれも日本の雇用慣行の見直しにおいて最重要なテーマといえる。

各テーマにおける著者の提言は実現不可能なことを主張して、結局、現実を何も動かせない、または、ささやかに実現可能なことを述べて、結局、問題の本質の改善に何もつながらないといった類似本とは一線を画している。

また、各章のタイトルは興味をそそられるもので、「第2章 効率的な労働時間規制へ」、「第3章 女性の管理職比率30%をどう実現するか」、「第5章 解雇ルールの明確化で「労・労対立」を防ぐ」など、問題の本質を的確に表現したものとなっている。

著者の抱く問題意識は労働市場の改革に向けられている。急速に進む少子高齢化のもとで、貴重な労働力を衰退産業・企業から新たな分野へ円滑に移動する仕組み作りが日本経済発展の鍵だと認識しているからである。

しかし、日本社会は過去の成功体験から、男性正社員を中心に「長期の雇用と家族を養う生活給を保障される代わりに」、「どのような仕事でも無限定で働くという」、「職務の安定性を犠牲にした長期的保障」（日本の雇用慣行）が今もって続いている。しかし、こうした働き方は、今後の高い経済成長が期待できない中、多くの労働者にとってリスクの高い働き方となっているという。

一方、女性、高齢者、非正規社員、外国人など働き手が多様化する中、柔軟性を欠いた現在の日本の雇用慣行では対応出来ないという。また、こうした多様化を背景に、大企業正社員とその他の労働者との間の対立＝「労・労対立」についても警鐘を鳴らしている。

著者は、それぞれの章で取りあげた労働問題の各テーマについて、実態認識と解決のための提言を行っている。

一読して興味深かった点は、労働市場改革や労働組合の強化など、抜本的な改革案を提示した後で、当面の間の現実的対策を提示していることである。例えば、第2章の労働時間規制では、長時間労働への抑止力を事実上欠く現行法に対し、まずもって政府主導で労働時間の総量規制の実現を訴えている。労働市場改革など将来の構造改革を見据えながら、こうした長時間労働の規制のための実現可能な提言をしているといえる。

高収入者（さして高収入とは思えないが）だからといって労働時間規制の適用が除外される労働基準法の改正案では、健康的で、生産性の高い労働を実現できないと思われる。日本の労働市場や雇用慣行の問題と課題について、包括的に理解することを希望される方にとって、期待を裏切らない書籍といえるだろう。（西村 博史）